

どうしたらいい!?

ここやったら絶対見つからへんわ

社会福祉法人あおば福祉会 瀬川保育園（大阪府箕面市）[5歳児]

<事前の状況> 11月の始め、3歳児の祖父からカマキリの卵をいただいたので、おはなし会でカマキリの絵本を紹介した。〈「かまきり」（長林閑：作 フレーベル館）「かまきりによっき」（久保秀一：写真 七尾純：文 偕成社）「昆虫記」（今森光彦：作 福音館）〉そこでカマキリは逆さになって卵を産むことや、今回の卵は形からオオカマキリだとわかる。3、4、5歳児の全クラスが「カマキリを孵したい」ということになり、翌週、みんなが見られるように幼児全員で集まり、園庭の木の枝に結び付けることになる。

	子どもの様子	援助(♡) 読み取り(※)
卵はどうする? 考える・考え合う	<ul style="list-style-type: none"> ・園庭の木のどこに“カマキリの卵の付いた枝”を結び付けるか相談する。「産まれた時につかまる葉っぱがたくさんある方がいい」、「低い所は小さい子が間違えて引っぱったりするかも」「付けた所を忘れないようにね」などの意見が出る。そしてアラカシとマテバシイの木に枝を付ける。この時5歳児が「鳥に食べられないかな」と言う。 ・園庭に出ると何人かは真っ先に卵を見に行き、「大丈夫だった」と伝える。5歳児は「早く産まれないかな」「産まれる時は私たちもう小学校や、どうするの」「ちゃんと教えてよ」などと話す。 ・(翌週)5歳児が「カラスが何度も枝をつついて、カマキリの卵を食べに来ていた」と言い、あわてて見に行くと卵の付いた枝は1つになっていた。 ・子どもたちはもう一度、図鑑などを調べる。「やっぱり、もっと見えにくい所じゃないとだめなんじゃない?」「葉っぱがいっぱいないとね」「でも今は冬だから」「空から見えちゃうんだよね」と口々に言う。「空から見てもわからないくらい、葉っぱが茂っている木はあんまりないね」と悩んでいると「春になって葉っぱが出るまで、中でとっといたら?」と話し合う。「ほんまや、ほんでカラスから見えんようになったら付けたらいいわ」ということで、あわてて卵を回収し、春まで文庫の部屋で守ることにする。 	<p>♡5歳児らしく考えているので、「毎日、鳥に食べられないか気をつけて見といてね」と声をかける。</p> <p>※おはなし会で実物のカマキリの卵を見ながら本を読み、自分たちで木を選んで卵の付いた枝を結び付けたので意識は高く、毎日パトロールをしている。</p> <p>♡先の見通しをもった会話に成長を感じた。5歳児には生まれたら連絡すると約束した。</p> <p>※カマキリの卵は、冬でも葉の落ちない笹や藪の中で多く見つかる。鳥などに襲われる危険の少ない場所を選んでいるのだろう。しかし自然の摂理とはいえ、本当に目の前で食べられてしまい保育士自身、知識も見通しも甘かったことを反省した。</p>
引き継いだ卵 命を守る	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度の5歳児に託されたカマキリの卵を、再び園庭の木に付け、孵化させる相談をする。 ・今年の5歳児も卵がカラスに食べられたことをよく知っていて、「空から見えない」ことに意見が集中する。 ・その後、園庭の現地でさらに相談しながら考える。「どこが一番見えないかな」「産まれた時も小さいから、すぐ食べられるやろ。だから葉っぱがたくさんないと隠れられない」「付ける紐も緑色にしないと空からわっっちゃう」「この中がいいと思う。葉っぱもいっぱいやし、空からも見えへん」「レンギョウのトンネルの中?」「だってカラスから見えへんやろ」全員「ここやったら絶対見つからへん」と言い、青々とした葉の茂みの深い枝に卵の付いた枝を結び付け、再び子どもたちによるカマキリの卵パトロールを始める。 	<p>※カラスには見つかり難い所を見つけた子どもの洞察力に感心した。</p> <p>※「カマキリの卵」だけでなく、関連する事柄も含めて知ること、より深い心の動きを伴う理解につながるように思う。</p>
観察	<ul style="list-style-type: none"> ・5月、卵から最初の成虫が出てきた。次々と卵から孵るカマキリに、「産まれた!」と子どもたちが集まる。この孵化を見た日に、5歳児クラスではカマキリの絵本を楽しみ、カマキリへの思いを話した。 	<p>♡絵本「162ひきのカマキリたち」(得田之久：作 福音館)を読んだ。</p>

ポイント

子どもたちは「飼う」という発想ではなく、「どうしたら無事に産まれるのか」「どこで産まれたらいいのか」という思いを共有しています。その思いが次の5歳児に引き継がれていることから、園全体が「身近な自然や生き物と一緒に生きている」という感覚でかわっている姿が浮かびます。こうして、命や身の回りの動植物の状況を大切に考える「共生」につながる学びや育ち合いが引き出されています。